

灰を忘却から救出するためのメモランダム

—The Memorandum to rescue ashes from falling into oblivion—

神谷 英二*

要旨 本研究は、デリダの「灰」を忘却から救出することができるかどうかを解明するためのものである。その第一段階として、本稿では灰を忘却から救出しようとするときに現出する問題系を整理し、俯瞰する作業を行う。より具体的には、デリダの言う灰の存在様式を見定めた上で、「灰それ自体を忘却するとはいかなることか」を問うことが目標である。研究の結果、灰は「自らを与えつつ、存在の彼方にある存在」であり、「忘却の忘却」であることが明らかとなる。さらに、ドゥルーズの「消したもの」とナンシーの「記憶しえない記憶」の議論を参照しつつ、灰を忘却することの意味を探究し、その結果、灰を忘却することは、絶対的な非-回帰の形象を喪失することであり、それによって、日付と固有名をもつあらゆる経験は特異性の中に閉じ込められ、いかなる反復も不可能になり、すべての経験は我有化の回路に閉じ込められることになることが分かる。

キーワード 灰 存在 デリダ 忘却 消したもの 記憶しえない記憶

<作業のはじめに>

「私は、亡霊と炎と灰とについてお話ししようと思う。」(1987a : 11)

デリダは、ハイデガーに関する、ある講演をこのように始めている。

この炎は、さしあたりはホロコーストの炎だと考えられる。しかし、存在者を抹殺し抹消しようとする炎は、いつでもどこでも立ち上り得

る。戦争やテロリズム、大災害は言うまでもない。教室内のいじめも、インターネット空間内の炎上もまた、この炎が立ち上るさまであろう。また、人口減少と空き家の急増に見舞われ、恢復しようもなく衰退していくまちの姿にも、炎が二重写しになる。私たちは、炎と炎の間で、平和や安全安心と思ひ込み、運よく日々の暮らしをしているだけだ。

さらにデリダは、「日付を焼き尽くす狂気」

* 福岡県立大学人間社会学部・教授

(Derrida 1986 : 72) という炎を描写する。或る日の或る人々とのかけがえのない記憶、日付と固有名をもつ記憶を焼き尽くす炎が確かにある。

この論考は、炎を避けよう¹⁾という試みのためのものではなく、灰を忘却から救出することができるかどうかを明らかにするためのものである。灰を忘却から救出しようとするときに現出する問題系を整理し、俯瞰するためのメモランダムであり、俯瞰図の素描である。

より具体的には、デリダの言う灰の存在様式を見定めた上で、「灰それ自体を忘却するとはいかなることか」を問うことがこの論考の使命なのである。

しかし、ここには大きな陥穽が待ち受けている。「自分が分析しているものを自分自身が所有していると見做してしまう。」(Derrida 1972b : 67) という危険だ。わたくしが灰を忘却から救出しようというのは、まさにこうした、人間の陥りやすい、避けるべき行為なのではないのか。もちろんこの論点を灰とともにいづも忘れないようにしなければならない。

そもそも memorandum とは、ラテン語で「書きとめるべきもの」という意味の *memorandus* から来ている。この語は、*memorare* 「思い出す、語る」の動形容詞の中性形名詞用法である。それゆえ、メモランダムに書きつけるという行為そのものが、エクリチュールや出来事に思い出すべきもの、語るべきものという位格を与え、忘却から救出することなのだと言い得るように、一見思える。メモランダムの和訳が「備忘録」であることを思い出そう。ハラルト・ヴァインリヒも言うように、人間は「忘れる動物 (*animal obliviscens*)」(Weinrich 2005 : 7) である。それゆえ、忘

却は人間の形相であるかも知れず、つねにすでに何でも忘却される可能性はあるので、忘却された時を予想し、それに備える行為が展開される空間が「備忘録」なのだ。しかし、それでもメモランダムそのものが焼き尽くされてしまえばどうなるのだろうか。この決して忘れられない不安とともに思索の作業を開始しよう。

< 1 灰の存在様式 >

il y a là cendre. (Derrida 1972a)

わたくしもデリダとともに、ここから出発しよう。この文がすべての思索の始まりであり、終わりであろう。

La dissémination の末尾、ページ番号なきページ。408ページと言い得るかも知れないページ。だが、そのページは何と呼ぶべきものなのか、誰もその記憶すらもたない。

Il y a と書き得るのだから、灰は存在するようだ。少なくともデリダのテキストの中では散逸せずに。

「自己自身から遠ざかりつつ、そこにおのれの全体を形成しつつ、ほとんど残余なく、エクリチュールは一気に負債を認め、かつ否認する。署名が最終的に崩壊する。中心から遠く離れて、さらには中心にあって分有される諸々の秘密から遠く離れてそれらの灰と化すまで散逸する。」(Derrida 1972a)

彼の考えでは、灰は固有名や署名の散逸や忘却と繋がりがあろうだ²⁾。この後に続く、謝辞として挙げられた固有名の末尾に、*il y a là cendre.* は置かれている。忘れられないためであるかのように。あるいは、忘れていたのを思い出したかのように。

さあ、ここまで押さえた上で、焼き尽くされ、

灰になる前に『火ここになき灰』を繙こう。

「灰がこの世に存在する何ものでもないのは分かっている。一つの存在者として残っている何ものでもない。それはむしろ存在だ、あるのは——それは、そこにある存在の一つの名なのだが、自らを与えつつ（灰がある＝それは灰を与える）しかし何ものでもなく、あらゆる存在するものの彼方にとどまっている（存在するものの彼方の灰）、それは何ものでもないのだが、言うことを可能にするために発音不可能なものにとどまっている。」（Derrida 1987b : 57）

「自らを与えつつ、存在の彼方にある存在³⁾。これがさしあたり、灰の存在様式の表現である。

「すべての痕跡同様、この痕跡もまた自分から消えていく運命にあり、道を見失わせる一方で、記憶を灯すのだ。灰とは的確だ。なぜなら、跡をとどめないがゆえに、まさしく灰は他の痕跡以上に、そして他の痕跡のように線を引く＝痕跡を残す (trace) からである。」（Derrida 1987b : 41-43）

したがって、灰は「もう何もとどめおかないために、とどめおくもの」（Derrida 1987b : 19）とも言われることになる。ただし、このように「とどまり続けること」「滞留」が強調されると、灰は存在の彼方ともされるだけに、永遠との区別が曖昧になってくる。わたくしは今のところは、灰の場所は「永遠とは峻別される時間の外部」（守中 2004 : 9）と考えている。

il y a là cendre.

この言葉を署名者は、受け取ったかどうか定かではない。ただ、出会っただけである。署名は、崩壊し、散逸し、灰となる。「ふと口から漏れ出て、人が認める前に失われていく、あ

れらの言葉。」灰とは「なにかが取り返ししようもなく失われてしまったことの痕跡」（梅木 2005 : 94）である。

失わないためにすべてを燃やすこと。そして、失ってしまうために手元にとどめおこうとすること。この喪失と保持の絶えざる反転の操作それ自体を燃やし尽くし、無化すること。そして、「なにもかも失い、なにも残さず、すべてを捨てて、ありえないようなチャンス⁴⁾に託すこと」（梅木 2005 : 94）、これが灰において賭けられていることである。

「この文が述べているのは、文が今あるものではなく、それがあった (fut) ところのものなんだ。」（波線、原文はイタリック）（Derrida 1987b : 19）とある声が語りかける。

futには、feuが含まれている。「火」にして、「亡き」であるfeu。êtreの三人称単数・単純過去であるfutの中に、feuが記憶されている。デリダはこのfutに着目することで、出来事がかつて生じたことの打ち消し得ない性格を表現する。例えば、ジョイス論では次のように言っている。

「この出来事はあったのだ (fut)。それは打ち消し得ないものにとどまっているのだが、人はそれを打ち消すことしかできない。そして、始まりにあったものとは、まさにそれであり、このドラマである。つまり、打ち消し得ないものであるがゆえに打ち消すしかないこの『行為』である。」（Derrida 1987d : 46）

il y a là cendre.

この文は、灰について何かを語るだけでなく、何ものでもないものが存在する「場」となる。それは、「純粋な場 (un lieu pur)」（Derrida 1987b : 21）。しかし、この純粋さとは暴力の別の名ではないのか。おそらくはその

通りなのだ。純粹とは火だからだ。古代ギリシア語では、*mûl*は火という意味である。

「何も起きなかったであろう。場所以外には。」そこには、灰がある。つまり、場がある＝理由がある (*il y a lieu.*)。ここでは、灰は場所の別の名になっている。火と灰が、場所を開けつつ場所を占める。そして、理由がある。この変奏にして擬装。 *il y a lieu de...* というイディオムの力。(Derrida 1987b : 21)⁵⁾

いまは亡き梅木も言うように、灰とは弁証法的に止揚されるままにはならないものの形象である。それは、かつてあったものの喪失、その絶対的不在の記号である。それではここで、梅木のまとめも援用しつつ、散逸しない前に、灰の存在様式についてまとめてみよう。

- (1) 灰が表象するのは、全面的な喪失、跡形もなき破壊の跡である。
- (2) それは、回収不可能な残余であり、取り返ししようもない喪失である。
- (3) 灰とは、これらの失われたものの痕跡ではなく、非一回帰を示す。

このようにして、灰は「あるものの消滅を証言するのではなく、むしろその消滅について証言するもの自体の消滅を証言する。」(梅木 2005 : 102) それは、言わば、「証人の不在の証人」であり、「忘却の忘却」である。

こうして、灰は存在から外に出てしまう。そして、存在の彼方の存在となる。あるいは、「残っているものと存在しているものとの差異」(Derrida 1987b : 23) なのだ。

< 2 灰、日付、固有名 >

「パウル・ツェランのために」書かれたとされる『シボレート』には、灰について多くの言及がある。そうした記述の中で、デリダは特異性と反復可能性が両立する稀有な場面を描き出す。それもヘーゲル的な弁証法の陥穽にはまらないように細心の注意を払いながら。

日付や固有名は、一度だけ生じる特異な出来事を示しているながら、同時にその出来事を記憶させ、記念し、反復し、ある仕方で回帰させるものでもある。もちろん、日付や固有名が指示するのは、「あの日、あの時、あの場所で、あの人が」という唯一で特異なかけがえのない事柄である。しかし、もしそれがいかなる仕方で反復し得ないならば、発生するとともに消滅してしまい、持続することはできないだろう。何らかの形で反復可能でない限り、またその同一性をとどめたまま分割可能でない限り、それを誰も読み取ることができないし、表現し、伝達し、理解することもできない。おそらく自己の経験であっても想起し得なくなるだろう。

日付や固有名が示すのは、特異でありながら、そうしたものとして再び回帰し、反復し、読み取り可能となるものなのだ。デリダ自身の説明を聴こう。

「日付とは亡霊なのだ。だが、不可能な回帰のこの再来は、日付の中に刻印されている。それはコードによって保証された記念日の環＝指輪の中に刻印され、明記されている。」(Derrida 1986 : 37) そして、「日付はおのれの刻印を除去することによって、おのれを刻印する。」(Derrida 1986 : 67)

これはどういうことか。日付や固有名は、おのれの生起の時と場を失わなければ、つまり、

特異性を失わなければ、別の時、別の場で読解できるものにならないのだ。これはさらに言えば、何かを意味するためにはそれ自身が失われなければならないということだ。

すなわち、「その読解可能性はその特異性の喪失という無残な報いを受けることになる。これは読解そのものに対する喪である。」(Derrida 1986 : 67) この喪失の経験において、日付が「ある日、ただ一度だけ、ある固有名のもとにそこで焼き尽くされたものが何であるかさえわからない灰の本質なき灰となるかもしれない。」(Derrida 1986 : 66) とされる。

ここで日付、固有名、灰が一つの流れに合流する。「名は、灰のこの運命を日付と分けもっている。」(Derrida 1986 : 66) そして、日付とは一人の証人である。だが、人はその日付が何のため、どのような人々のための証言かをすべて知ることなしに、ともかくそれを祝福することができるのだ。しかし、それにも関わらず、この証人のための証人がもはや存在していないということも十分にあり得る。「われわれがこうしてゆっくりと接近していくのは、日付と名との、——そして灰とのあいだの類縁性なのである。」(Derrida 1986 : 60)

日付も灰と同じく、跡をとどめず線を引く。

一個の日付は、運び出され、搬送され、舞い上がる。それゆえ、日付はただ忘却され、喪失されるのではなく、その読み取り可能性そのものにおいて消え去るのだ。

そして、この消去は、なにか突然の偶発事のように日付に生じるわけではなく、予めすべての日付そのものに胚胎されているものだ。こうして、日付は消去によって特異性を失う。しかし、それによって経験は反復可能性を獲得する。「読み取り可能性が日付を、つまり日付が

読むべく差し出していることそれ自体を消去してしまうのだとすれば、この奇妙な過程は、日付の記刻そのものと同時に始まったということになるであろう。」(Derrida 1986 : 40) 日付は、おのれが記憶していることよりも長く生き延びるために、特異性の聖痕をおのれの裡に隠蔽しなければならない。それが、日付にとって、おのれの再来を保証する唯一のチャンスなのだから。そして、「消去あるいは隠蔽——回帰の環に固有なこの滅却こそ、日付記入の運動に属するものである。記念され、同時に取り集められかつ反復されねばならぬもの、それはいまや、同時に日付の無化であり、一種の無、あるいは灰なのである。灰が、われわれを待っているのだ。」(Derrida 1986 : 40)

こうした灰と日付の出会いは、あらゆる固有名にも同じく到来するというのがデリダの主張だ。人の名もまちの名もすべて消去と喪失の危険に晒される。しかし、もちろんこれは大きな賭けであり、再生しないこともあるのではないのか。多くの怒りや喜びが跡形もなく焼き尽くされ、想起する者すらもはや存在しなくなっているのではないのか。イデア主義的な説明を繰り返すのみで、この懸念にはデリダは一言も応答しない。

「痕跡あるいは灰。これらの名は、他のもろもろの名にも関わっている。つまり一個の日付の運命は、あらゆる名の、あらゆる固有名の運命に等しい。」(Derrida 1986 : 73)

ここに「痕跡あるいは灰」とデリダは書きとめている。しかし、もちろん灰を痕跡と同一視できるのかは大きな疑問を残す。痕跡はその根拠を指し示しかねない。跡を記したオリジナルを示しかねない。

わたくしも灰は失われたものの痕跡ではな

く、非一回帰の形象と考えている。ただし、梅木のようにそれを「記号」と言ってよいかは、また別の思索課題である。

＜3 消尽したもの＞

灰が「存在の彼方の存在」であるとともに、「場」でもあることをしっかりと記憶にとどめよう。そして次に、こうした灰の姿をよりくつきりと描き出すために、ドゥルーズが提起した「消尽したもの」(l'épuisé)という概念を思い出そう(Beckett/Deleuze 1992)。

「消尽したもの、それは疲労したもの(le fatigué)よりずっと遠くにいる。」(Beckett/Deleuze 1992: 57)

このように、消尽は疲労と対置される。疲労したものにはそもそも主観的可能性はない。したがって、最小限の客観的可能性も実現することができない。それでも最小限の可能性は残っているという。ドゥルーズのこの主張は、いったいどういうことだろうか。それは、人は決して可能なことのすべてを実現するのではなく、実現するにつれて可能なことをさらに生み出すからなのだ。しかしながら、消尽したものは、可能なことのすべてを尽くしてしまう。もはや、何も可能にすることができない。彼は、可能なことを消尽することによって自分を消尽し、あらゆる疲労の彼方で可能なことと訣別する。可能なものを生み出すことは決してない。

実は、人は生まれる前に、すでに消尽しているのだ。消尽することは、あらゆる意味作用を放棄することである。実在があるとすれば、それは可能なものとしてのみである。そして、ドゥルーズによれば、言語は可能なことを名づけるのだ。ここで、「灰」のことを思い出して

みれば、言うことを可能にするために発音不可能なものにどどまっているとはいえ、名がある以上、ドゥルーズの道具立てでは、灰は何らかの可能なものとしての実在ということになる。

人にとって、言語はつねにすでに我有化し得ない他者である。この言語が消えたとき、すべてはただ「そのとき」として見られ、言語が昏くしていたものがすべて取り除かれる。ここに形象が現われる。形象が完全に限定されながらも無限定なものに達するのと同じように、空間はもちろん幾何学的には完全に限定されているが、いつも任意の、廢れた、無用の空間である。

「空間は、事件の実現を可能にする限りで、潜在性を享受する。」(Beckett/Deleuze 1992: 76)これが通常の空間のあり方である。しかし、消尽は任意の空間の潜在性を尽くしてしまうというのだ。消尽した空間では、「ここでもあそこでもなく、大地を踏むすべての歩みは、何にも近づくことがなく遠ざかることもない。」(Beckett/Deleuze 1992: 75)これがドゥルーズの言う「消尽した空間」である。

デリダは、『シボレート』の中で、ツェランの詩に現れる名や日付は「灰」に他ならないとしていた。これこそが、「消尽した空間」に残る「消尽したもの」の痕跡である。「灰というものはある、おそらく、けれどもひとつとして灰は存在しない。灰というこの残滓は、存在したものの、かつて現在という様態において存在したものの残りのように見える。つまり、それは現前する—存在という源泉によっておのれを培い、おのれを潤しているかのように見える。だがそれは存在から出てしまうのだ。つまりそれはおのれが汲み上げているかに見える存在というものを予め汲み尽くしているのである。」

(Derrida 1986 : 77)

この記述でデリダは、どのようにして「消尽したもの」、「不在」を書くかという問題に触れている。確かにあったものを記念する名や日付が焼き尽くされて、灰としての名や日付が存在するというのではない。ツェランの子午線が記す日付が存在を予め汲み尽くしているのであれば、灰はやはり「かつてあった」とは言えない、「存在しえないものの痕跡」ということになる。(cf. 田中 2000 : 384-385)

消尽することは、あらゆる意味作用を放棄することなのだから、「消尽したもの」と「消尽した空間」は言語化の地平から退引し続ける。これを言語化しようとするデリダの努力の痕跡こそが「灰」という「固有名にはなりえない名」なのだ、とわたくしは考えている。

< 4 忘却も記憶もされないもの >

それでは、こうした存在様式をもつ灰は、さらに忘却されることがあるのか。

ここでわたくしは、ナンシーの「聖母訪問」を巡る思索を思い出すことになる。本稿のまとめの前に、灰の忘却を描き出す準備作業として、「記憶しえぬ記憶 (immémoire)」「記憶にないほど古いもの (l'immémorial)」を扱おう。灰が「記憶にないほど古いもの」の露呈なのかどうか。おそらくこれが次の思索課題の一つだから。

ナンシー『訪問』の冒頭を見よう。

「芸術が記憶と関わりをもつとき、その記憶とは奇妙な記憶である。そこで記憶を喚起されるのは、思い出のうちに委ねられたことが一度もないものであり、それゆえ忘却も記憶もされない。」(Nancy 2001 : 9) それはこれまで

一度として体験され認識されたことがないものだ。「いかなるアナムネーシスもそこへと遡ることなどできない。」(Nancy 2001 : 10) それにもかかわらず、私たちから離れることがない。

「記憶にないほど古いもの」は、優れて生誕に先立つものなのだ。したがって、それはいかなる思い出の中にも不在である。つまり、誰にとっても存在措定を中和化された形でさえ、存在することもない。

「いかなるアナムネーシスもそこへと遡ることなどできない」はずなのに、「記憶にないほど古いもの」、まさにそこへ向けて、ある無限の記憶、過剰記憶、あるいは「記憶しえぬ記憶」が終わることなく遡行する。これが現前するのは、断じて世界の外ではない。記念物の手前、あるいは彼方。自己と主体化可能なものの彼方であり、かつ手前。つまりは世界の彼岸。しかし、これは世界の外ではない。世界内に存在しながら、彼岸にあるというのだ。はたしてこれは「存在の彼方」のことなのか。存在様式として、灰と重なるのか。

ナンシーは、こうした思索において、世界の二重の可能性に賭けようとしている。それは、「ニヒリズム」と「永遠」という二重の可能性である。ニヒリズムは、「於いて(a)」が「彼方 (au-delà)」を吸収する場合と考えられている。それに対し、永遠なるものは、< 現 (da) > を開くために到来し、この開示そのものにおいて、< 現 > にその現存在を与えるところの彼方として理解できる。(cf. Nancy 2001 : 50)

こうしたものを思索するための努力は、意味のプラクシスへ向かう。この努力は形象への本質的な依拠を含み込んでいる。ところが、ナンシーによれば、形象は表象ではないのだ。

何かを代理する記号などではなく、現一思考 (pensée-là) であると主張される。それは、現前へと自らを開く場所の現実性としての思考である。この思考により、場をもたないものに場を与える場の開示がなされる。ここで言う「場をもたないもの」とは、本質的に超出し、自らを超出するものとしての現前性のことである。

デリダは、「灰が場所を開けつつ場所を占める」という光景を描いていた。そして、「自らを与えつつ（灰がある＝それは灰を与える）しかし何ものでもなく、あらゆる存在するものの彼方にとどまっている」（Derrida 1987b : 57）とも述べていた。

忘却も記憶もされない「記憶にないほど古いもの」とは何なのか。何かの痕跡なのか。刻印なのか。すぐに灰と同一視したくなる誘惑を今は払いのけて、「記憶にないほど古いもの」が灰の別の名であるならば、原理的に忘却はあり得ないことを確認するにとどめよう。記憶されないものは忘却されない。しかし、それが灰として自らを開示しているのか否か。これはわたくしのもとにとどまる、新たな謎である。

<作業のおわりに>

デリダの言う灰の存在様式を見定めた上で、「灰それ自体を忘却するとはいかなることか」を問うことがこの論考の使命であった。ここまでの行程をまとめよう。

忘却の忘却である灰を忘却することは、絶対的な非一帰の形象を喪失すること、絶対的な喪失を喪失することだ。

そして、そうなれば、日付と固有名をもつあらゆる経験は特異性の中に閉じ込められ、いかなる反復も不可能になる。換言すれば、すべて

の経験は我有化の回路に閉じ込められることになる。おそらくそこには新たな炎が立ち上ることになる。

ここでわたくしのメモランダムは一旦閉じられる。もちろん、明日、焼き尽くされないという約束はされていない。

註

- 1) ここには、デリダの指摘するハイデガーが「避ける (vermeiden)」を多用するという問題が反響している。
- 2) ベンヤミンの人生を記憶し得ない始まりから記憶を消し去り得る終わりに到るまで縛り続きた原理的に想起し得ない「アゲシラウス・サンタンデル (Agesilaus Santander)」という名もおそらく灰なのだ。灰である名、灰でしかあり得ない名。そもそもこの名は、固有名なのかどうか。命名者以外はその存在自体を誰も知らないし、認識すらできない。しかし、確かに存在する名。『ヴァルター・ベンヤミンと彼の天使』のなかで、ショーレムが、Der Angelus Satanusのアナグラムであると看破した名。
- 3) 「非在の場所が天使の次元である。」マッシモ・カッチャーリの『必要なる天使』冒頭 (Cacciari 1992 : 13) でこう宣言されている。また、「見えざるどこでもない場所」とも言われる。わたくしはデリダの灰は、実はカッチャーリの天使と強い親和性をもっていると考えている。
- 4) このチャンスはまさに、ベンヤミンの言う「危機の瞬間」、[弁証法的形象] が到来する時、そこで遊歩者にもみ生まれるチャンスのことである。
- 5) ここでマルルメの『骰子一擲』からの引用を示しておこう。
「なにごともし起こりはしないだろう/場所以外には/おそらく/ひとつの星座を/のぞいては」

<参考文献>

- Agamben, Giorgio (1998) : *Quel che resta di Auschwitz: L'archivio e il testimone*, Bollati Boringhieri.
- Assmann, Aleida (1999) : *Erinnerungsräume: Formen und Wandlungen des kulturellen Gedächtnisses*, C. H. Beck.
- (2006) : *Der lange Schatten der Vergangenheit : Erinnerungskultur und Geschichtspolitik*, C. H. Beck.
- (2007) : *Geschichte im Gedächtnis : von der individuellen Erfahrung zur öffentlichen Inszenierung*, C. H. Beck.
- Beckett, Samuel and Deleuze, Gilles (1992) : *Quad; et, Trio du fantôme;...que nuages...; Nacht und Träume. Suivi de L'épuisé*, Éditions de Minuit.
- Benjamin, Walter (1972-1989) : *Gesammelte Schriften*, Unter Mitw. von Theodor W. Adorno hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Suhrkamp.
- Cacciari, Massimo (1992) : *L'angelo necessario*, Ed. riv. e ampliata, Adelphi.
- Celan, Paul (2000) : *Gesammelte Werke in sieben Bänden*, Bd. 3, Suhrkamp.
- Deguy, Michel (1995) : *A ce qui n'en finit pas : thrène*, Seuil.
- Derrida, Jacques (1972a) : *La dissémination*, Seuil.
- (1972b) : *Positions*, Éditions de Minuit.
- (1974) : *Glas*, Galilée.
- (1980) : *La carte postale: de Socrate à Freud et au-delà*, Flammarion.
- (1986) : *Schibboleth: pour Paul Celan*, Galilée.
- (1987a) : *De l'esprit : Heidegger et la question*, Galilée.
- (1987b) : *Feu la cendre, Des femmes*.
- (1987c) : *Psyché, Galilée*.
- (1987d) : *Ulysse Gramophone: Deux mots pour Joyce*, Galilée.
- (1993) : *Khôra*, Galilée.
- (1995) : *Mal d'archive : une impression freudienne*, Galilée.
- (1996) : *Le monolinguisme de l'autre, ou, La prothèse d'origine*, Galilée.
- (1998) : *Demeure: Maurice Blanchot*, Galilée.
- (2009) : *Demeure*, Athènes, Galilée.
- Deleuze, Gilles and Guattari, Felix (1991) : *Qu'est-ce que la philosophie?*, Éditions de Minuit.
- Heidegger, Martin (1984) : *Sein und Zeit*, 15 Aufl., Max Neymer.
- Lévinas, Emmanuel (1972) : *Humanisme de l'autre homme, Fata Morgana*.
- (1976) : *Noms propres*, Fata Morgana.
- Mallarmé, Stéphane (1993) : *Un coup de dés jamais n'abolira le hasard*, Gallimard.
- Nancy, Jean-Luc (2001) : *Visitation, de la peinture chrétienne*, Galilée.
- Ricœur, Paul (2000) : *La Mémoire, l'Histoire, l'Oubli*, Le Seuil.
- Sebald, W. G. (2001) : *Austerlitz*, Carl Hanser.
- Todorov, Tzvetan (1995) : *Les abus de la mémoire*, Arléa.
- (2000) : *Mémoire du mal, Tentation du bien : enquête sur le siècle*, Robert Laffont.
- Weinrich, Harald (2005) : *Lethe, Kunst und Kritik des Vergessens*, C.H. Beck.
- 梅木達郎 (2005) : 『支配なき公共性：デリダ・灰・複数性』 洛北出版
- 神谷英二 (2009) : 「遊歩者・記憶・集団の夢：ベンヤミン『パサージュ論』による記憶論構築のために」、

- 『福岡県立大学人間社会学部紀要』第17巻第2号、福岡県立大学人間社会学部、67-79
- (2010)：「固有な名と記憶(1)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』18(2)、福岡県立大学人間社会学部、13-25
- (2011)：「幼年時代の記憶と集合的記憶(1)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』19(2)、福岡県立大学人間社会学部、65-76
- (2012)：「幼年時代の記憶と集合的記憶(2)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』20(2)、福岡県立大学人間社会学部、15-27
- (2013)：「幼年時代の記憶と集合的記憶(3)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』21(2)、福岡県立大学人間社会学部、35-46
- (2014)：「固有な名と記憶(2)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』22(2)、福岡県立大学人間社会学部、63-76
- (2016)：「瓦礫の記憶論のために」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』24(2)、福岡県立大学人間社会学部、77-90
- 関口裕昭 (2011)：『パウル・ツェラーンとユダヤの傷：〈間テクスト性〉研究』慶應義塾大学出版会
- 多木浩二 (2005)：『進歩とカタストロフィ：モダニズム 夢の百年』青土社
- 田中 純 (1995)：『残像のなかの建築：モダニズムの「終わり」に』未来社
- (2000)：『都市表象分析 I』INAX出版
- (2007)：『都市の詩学：場所の記憶と徴候』東京大学出版会
- (2016)：『過去に触れる：歴史経験・写真・サスペンス』羽鳥書店
- 丹生谷貴志 (1996)：『死体は窓から投げ捨てよ』河出書房新社
- 平野嘉彦 (2015)：『土地の名前、どこにもない場所としての：ツェラーンのアウシュヴィッツ、ベルリン、

- ウクライナ』法政大学出版局
- 守中高明 (2004)：『存在と灰：ツェラーン、そしてデリダ以後』人文書院
- (2012)：『終わりなきパッション：デリダ、ブランショ、ドゥルーズ』未来社

本稿は、日本学術振興会・平成28年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）・基盤研究C、研究課題名：「まちの物語論」構築のための記憶・忘却・喪失・再生に関する現象学的解釈学的研究（研究代表者：神谷英二、課題番号：25370024）の補助による研究成果の一部である。